

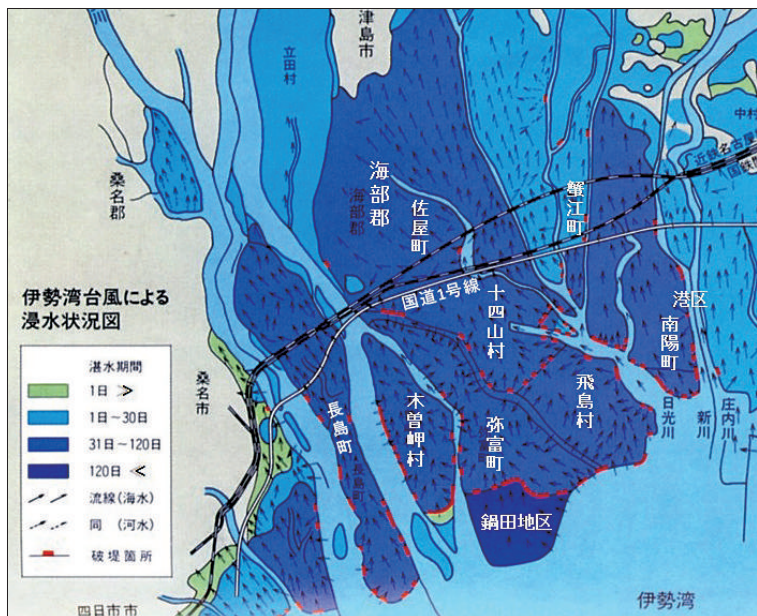


第四章 伊勢湾台風による集団避難

伊勢湾台風による 集団避難

一 はじめに

昭和三四（一九五九）年九月二六日の夜半に東海地方を襲った伊勢湾台風は、伊勢湾に面する海岸堤防を至る所で破壊し、名古屋市南部から



■ 浸水状況図（『自然に学び自然に備える』中部建設協会 平成21年より）

桑名市に至る広範な地域が長期間にわたって濁水に沈みました。多くの被災者は浸水した家屋の屋根裏部屋等での避難生活を強いられ、まさに「衣食住」に事欠く状態であり、さらに不衛生な環境下での伝染病が被災者を襲ってきました。

伊勢湾台風が及ぼした被害の原因について、これまで多くの工学的あるいは気象学的な研究が発表され、また、多数の地域住民の被災体験談も記録されてきました。しかし、災害弱者と呼ばれる老幼婦女子や児童生徒たちの集団避難状況は余り記録されていないようです。そこで本章では、集団避難状況を当時の新聞記事より取りまとめ、特に各地域の小・中学校の生徒たちの移動状況を整理しました。なお、本章で記載する市町村名は、特に記載がない場合は、被災時の市町村名としています。

二 対象とする地域

伊勢湾に面した名古屋市長区、海部郡南部の飛鳥村・弥富町、桑名郡

■ 桑名市、多度町、長島町、木曽岬村の被害

	罹災総数（人）	死者（人）	全壊（戸）	半壊（戸）
桑名市	38,004	184 (0.48%)	244	1,924
多度町	980	—	16	95
長島町	北部地区 (学区・長島北小学校)	1 (0.08%)	4	65
	中部地区 (学区・長島南小学校)	101 (1.97%)	130	408
	伊曾島地区 (学区・伊曾島小学校)	281 (12.33%)	96	109
	小計	383 (4.40%)	244	582
木曽岬村	3,312	328 (9.90%)	95	281
合計	51,004	895	599	2,787

『伊勢湾台風30周年記念』桑名郡長島役場 平成元年、『木曽岬村史』木曽岬村役場 昭和44年

長島町・木曽岬村の堤防は各所で決壊し、弥富町の鍋田干拓地は壊滅的状況となりました。

三重県桑名郡や愛知県海部郡南部の多くの被災者は、自衛隊の船やヘリコプターによって泥海に沈む家屋から救出され、老幼婦女子や児童が各県内各地に集団避難しました。本章では避難の「状況経過」を整理する事としました。しかし、集団避難方針は各県によって異なっていましたので、本章では三重県桑名郡の長島町と木曽岬村を対象に調べることとしました。

現在の桑名市全体での死者数は八九五人です。幸い現在の多度町の死者は〇人でしたが、旧桑名市は一八

四人であり、旧長島町は三八三人（四・四〇％）でその内七〇％以上の二八一人（一二・三三％）が長島町南部の伊曾島地区であり、鍋田川と木曽川に囲まれた木曽岬村は三二八人（九・九〇％）と異常な数に上りました。ここで、（ ）内は地域の罹災総数当たりの死者数の割合であり、木曽岬村ではほぼ一〇人に一人の死者数となっています。

三 被災地からの避難

台風通過から四日経った三〇日になっても、桑名郡長島町や木曽岬村の家屋は屋根まで没し、泥海に孤立していました。さらにこれらの地の被災者に赤痢が感染・拡大する恐れが大きくなりました。

このような非衛生的な状況と交通途絶による生活物資の欠乏、さらに小・中学生達への教育等を勘案し、一〇月一日に、三重県の災害対策本部は、老幼婦女子や子供を主体とし

た緊急避難方針を決定しました。

一日に県教育委員会の方針が「児童避難も考える」桑名、長島、木曽岬で」と毎日新聞の見出しに書かれ、同日の中日新聞夕刊は「伝染病を避けるため強制避難」木曽岬、長島の被災者」と知事の考えを伝えていきます。激甚被災地域に対して、ようやく混乱の中にも災害弱者への対応も軌道に乗り始めました。

長島町の学校は北から長島北小学校、長島南小学校、伊曽島小学校と長島中学校の計四校、木曽岬村では木曽岬小学校と木曽岬中学校の計二校でした。

亡くなった児童生徒数は、長島町での死者三八三人の内、長島町南部の伊曽島小学校の児童五九名が含まれ、多数の被災者が発生した木曽岬村の死者三二八人の内には、木曽岬小学校の児童五七人と木曽岬中学生一三人が含まれています。

なお、本章では、台風の翌年昭和三五（一九六〇）年四月に、長島北小学校は長島北部小学校、長島南小学校は長島中部小学校と改称しましたが、被災時の学校名としていきます。

四. 避難所の設置に向けて

避難行動に際して第一の重要な課題は避難者の避難所確保であり、次が避難した学童・生徒の教育環境の整備です。

一次避難所となった長島北小学校と伊曽島小学校は水に浸かり、隣接している長島南小学校と長島中学は被災者約八〇〇人が避難しており、児童生徒の教育環境は劣悪でした。さらに、劣悪な衛生状態のため、老幼婦女子等への赤痢等の伝染病の蔓延が危惧されました。

名古屋市教育委員会は被災児童・生徒の教育について「とりあえず避難先の学校で授業を受けさせる」とことを決め、愛知県海部郡も被災児童・生徒に対して名古屋市と同じ方針を取る事を決定しました。

一方、一〇月一日に三重県は桑名市、桑名郡長島町と木曽岬村の被災者に対する県営避難所の設置を決めました。児童・生徒の集団避難に関して三重県教育委員会は、地元が要望する「授業再開は学校ごとに一箇所での授業」を基本方針として検討を加え、五日の夕刊には「あすから長島木曽岬の学生 伊勢へ集団避難」と学校ごとで授業を再開することが大きく報道されました。

五. 三重県内の避難所

〔県営避難所の概要〕

（一）鈴鹿電気通信学園大ホール

旧海軍航空隊の格納庫跡であった鈴鹿電気通信学園（電通学園）大ホールのコンクリート底面約三〇〇㎡に床を造り、畳を入れて避難所としました。この避難所が最も多くの被災者を収容しています。なお現在、跡地は鈴



■ 数年前に取り壊された電通学園の大ホール
(NTT西日本三重支店提供)



■ 電通学園に避難した長島・木曽岬の被災者10月3日
(中日新聞社提供)

鹿医療科学大学薬学部（鈴鹿市南玉垣町）となっています。

一〇月二日に鈴鹿避難所として開設された電通学園大ホールに、長島町の九八人が三日からの集団避難予定日を繰り上げて避難し、翌三日には長島町から五六〇人程が避難しています。



■ 高田本山の食堂

（二）高田本山専修寺

高田本山専修寺（津市一身田町）は真宗高田派の本山であり、通称は高田本山と呼ばれています。

三日に専修寺の大講堂や大講堂より大きい食堂（全僧侶が食事をする堂）が津避難所とされ、同日に木曽岬村の避難者六四三人の内、四二八人が高田本山と電通学園に避難しています。

〔授業再開避難所の概要〕

（一）如雪園

如雪園は大正九（一九二〇）年に篤志家が参拝者のために造った敷地約二六四〇〇㎡の施設で、皇族を始め一般団体の利用が多くありました。が、伊勢避難所本部となりました。名称は庭園の花々が雪が降る如く咲き乱れていたことに起因しています。現在は神宮会館（伊勢市宇治中之切町）となっており、会館内のは

ら園の片隅に如雪園の碑が残っています。



■ 昭和初期の如雪園(『写真集伊勢』国書刊行会昭和61年)

(二)五鈴館と奥野家

民営旅館であった両館は、「おはらい町通り」の宇治橋と新橋との



■ 観光客でにぎわう旧五鈴館跡の店

間に現存しています。奥野家は宇治橋近くで現在は飲食業を営業しており、四一〇mほど新橋方面に行くとプリンや揚げ物などを扱うお店が旧五鈴館で、昔のままの建物です。

(三)三重大学旧校舎(県立水産学部)

避難所となった校舎(津市大谷町)は、台風が来襲した昭和三四年四月に三重県立医科大学(現三重大学)から水産学部へ所属変更されており、新聞記事等の避難所名は「三重大学旧校舎」、「県立水産学部」と記されています。

学校として利用されていたため生活の場と勉学の場に区別されていません。実験室が寮に改造され、一部屋平均一五人で、荷物もありましたので一人一畳半程度でした。

(四)鈴鹿通信病院鈴峯荘(鈴峯荘)

鈴峯荘(鈴鹿市庄野町)は、旧海軍工廠の施設を利用して昭和二五(一九五〇)年八月に開設され、昭和三四年夏まで通信病院の看護婦・職員宿舎でした。鈴峯荘は木造二階建て三棟(一棟延べ七二六㎡。二階に約三〇㎡の和室が各七室)の内、二棟と約二〇〇㎡の中央ホールを使用しますが、宿舎であったために学習の施設は無く、また、お風呂は約一km離れた民間工場のお世話になりました。

(五)楠小学校

楠小学校は、明治八(一八七五)年に現四日市市楠町北五味塚(三重郡楠町)に創立され、明治二〇(一八八

七)年に楠尋常小学校、昭和二二(一九四七)年に楠町立楠小学校と改称されました。

当時の新聞記事は、長島北小学校が楠小学校へ避難あるいは小学校で「勉強した」とは書いていますが、北小学校の児童達の避難生活場所については明確に書かれていませんでした。

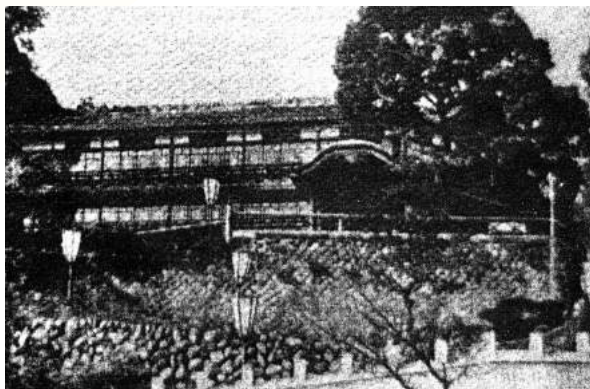
『楠町史』によれば、「長島北小学校の児童を一〇月一八日から十一月八日まで避難所として受け入れ、楠小学校旧木造校舎(昭和三四年二月に鉄筋コンクリート三階建て校舎が完成)に二〇〇人程の学童が先生と共に寝泊りし、ここで勉強した。

楠小学校の学童との交歓や、町民特に主婦たちの善意の奉仕もあって、苦しくも暖かさに満ちた避難授業であった。」と記載されています。なお、当時楠小学校に避難した人も、「楠小の生徒と交流した」と当時の事を思い出して話しています。

(六)神都国民道場(略称は神都道場)

神都国民道場は、明治三九(一九〇六)年に発足した社会教育団体の修養団の伊勢市での施設です。神都道場は如雪園から南に三〇〇mほど離れた旅館「別館対泉閣」(通称大橋館)の建物を使用しており、長島中学校生はこの建物に避難しました。

昭和三七(一九六二)年頃に立て替えられた現在の建物の側には、写真右隅に写っている楠が大きく聳え立っています。なお同道場は、現在「伊勢青少年研修セン



■ 神都道場として使用された昭和10年頃の別館対泉閣(通称大橋館) (『写真集伊勢』国書刊行会昭和61年)

ター」(公益財団法人修養団)と改称されています。

なお、伊勢市に設置された四避難所(如雪園、五鈴館、奥野家、神都道場)は約三〇〇m四方内に入る位置に近接していましたが、他は津市の三重県立大学、高田本山、鈴鹿市の電通学園、鈴峯荘、現四日市市の楠小学校と互いに離れており、避難生徒も教師も伊勢市の避難所よりは苦労が増したと思われる。

六、長島町と木曾岬村からの避難

次ページの「新聞記事からの避難状況表」は、桑名郡長島町と木曾岬村の一〇月一日の避難開始から二〇日の避難先での授業再開までを、中日・毎日・朝日の各新聞

	桑名郡長島町関係	桑名郡木曾岬村関係
1日	【被害状況】 ○桑名市市内の小・中学生の約半分に当たる6,500人が学校を失い、伊曾島小では59名、木曾岬小で57人、木曾岬中では13人も亡くなった。 ○長島北小・伊曾島小は水に浸かり、長島南小学校と長島中学は被災者収容所、桑名の光風中学は災害本部でヘリコプター基地となった。 ○三重県教育委員会は、桑名市・長島町・木曾岬村の小中学生8,200人、中学生1,200名の集団避難について協議した。 ○三重県は、木曾岬村・長島町の被災者が伝染病に罹患しないよう、員弁郡下の北勢町などを強制避難を決定。 ○長島町2,500人と木曾岬村500人の老幼婦女子を鈴鹿市の電通学園大ホール等への避難を決定。 【県営避難所設置の決定】 ○県営避難所を設置して緊急避難の方針が決定	
2日	【避難説得】 ○被害が甚大な長島町伊曾島地区は集団避難に賛成。被害が軽微な被災者は防災上の理由で避難を渋る。 ○長島町と木曾岬村の被災者3,000人（長島町2,500人、木曾岬村500人）の説得を開始。 ○2日までの集団避難希望者は、長島町455人、木曾岬村531人の計986人。 ○2日中に被災者に避難を説得し、3日から自衛艦2隻、小舟3隻で避難開始。 ○長島町の一部被災者は待ちきれずに2日に一部（96人）が鈴鹿避難所の電通学園に避難した。 ○2日から、四日市港・名古屋港間に1日2便の定期便（海上保安庁の船）が開通した。	
	【避難行動】 ○長島町の老幼婦女子96名が、3日の避難を繰り上げて電通学園に避難。 ○長島町⇒米軍ヘリで光風中学⇒バス2台で鈴鹿へ	
3日	【避難行動】 ○3日早朝から、長島町（560人）と木曾岬村（643人）の計1,203人が陸海空で電通学園と高田本山へ避難した。 ○木曾岬村の643人の内、215人（小学生99人）は電通へ避難。残りの428人は電通と高田へ避難。 ○3日夜の段階で、避難希望者は長島町伊曾島約50人、木曾岬村約150人（老・小・中生）であり、4日に高田本山へ移動した	
	○長島町の560人（伊曾島地区461人）は揚陸艇・ヘリコプター・バスで電通学園へ	○木曾岬村の215人（小学生99人）は自衛艦で電通学園へ
4日	【避難行動】 ○伊曾島の約50人は都羅新田の砂浜からヘリと伊勢大橋左岸側からバスで高田本山へ	
	○木曾岬村の約150人は鍋田川・木曾川沿いに海路で高田本山へ	
5日	【避難者数】 ○高田本山は、3日に118人、4日に121人の計239人（内7割が児童。教師の不在に不満が発生）。 ○電通学園は1,337人で、4日時点で満員（定員1,308人）。 ○三重県下小・中・高676校のうち、水害で144校が休校、11校が分散授業、11校が2部授業。	
6日	【避難行動】 ○6日午後、長島町の学童1,170人（長島北小270人、長島南小500人、長島中400人）と教師20人（学童905人・教師32人・PTA9人との記載もあり）が伊勢市の如雪園、五鈴館と奥野家の各旅館へ集団避難した。	
	【避難経路】 ○伊勢大橋左岸と都羅新田（伊曾島小の北側）の集結所⇒舟で自衛艦へ、 ○伊勢大橋右岸側（遠方からはトラックで集合）の集結所 ⇒徒歩で桑名市の住吉船着場⇒上陸用舟艇4隻 ⇒揖斐川河口で自衛艦に乗り換え島羽港⇒バスで伊勢市の避難所。	
	【臨時避難学校の開設計画】 ○電通学園内の建物借り、1学級を小学校で14人、中学校で8人程度とし、木曾岬小と伊曾島小で各6学級、木曾岬中で3学級で、授業再開を12日頃と予定。 ○高田本山5日現在で木曾岬・長島の239人（330人の記載有り）を収容]での授業再開は遅れるが、小学生は同本山で合同授業。中学生は近くの「一身田中」に編入予定。	
	【学校別の再編】 ○避難生徒1,870人が電通学園、高田本山に避難しているが、学校別に再編する。	
9日	【授業再開への移動】 ○高田本山の伊曾島小219人が14日迄に電通学園に移動する。 ○長島北小268人が如雪園から楠小へ移動する。 ○電通学園と高田本山の長島南小（209人）と長島中（412人）が伊勢市の4避難所に移動する。 ○伊勢市内で新たに避難所1ヶ所（神都道場）を新設する。	○木曾岬小（259人）と木曾岬中（39人）の計298人は電通学園へ
12日	【授業再開への移動】 ○伊曾島小学校（239人）が三重大学旧校舎へ移動 【授業再開の延期】 ○電通学園での12日の授業再開予定は、準備不足等で見送り。	○木曾岬小（345人）中（142人）の計487人が電通学園から鈴峯荘に移動。
	【10月12日現在の避難先の生徒数】 ○高田本山には木曾岬小中の約190人が避難。 ○10月13日の毎日新聞人名調査（12日現在）より ⇒ ①如雪園は長島南小269人と職員14人、長島北小268人と職員10人、②五鈴館は長島中135人と職員（校長を含み）7人、③奥野家は長島中142人と職員7人。	
13日	【授業再開への移動】 ○伊曾島小学校（221人）が「電通学園212人+高田本山9人」から三重大学旧校舎へ14日迄に移動。	
	【さらなる集団化で長島南小学校全員集合】 ○長島北小学校（267人）と職員（11人）は18日に如雪園から三重郡楠町（現四日市市楠町）の楠小学校に移動し、19日から授業開始。 ○この入れ替えに伴って、電通学園と高田本山に避難していた長島南小学校の各約100人が如雪園（既に児童269人と教師14人が避難）に移り、同校全児童（約500人）が如雪園に集合した。	
18日		
19日	【授業再開】 ○19日に長島北小学校（267人、教職員11人）が楠小で授業再開	
	○19日から鈴峯荘の木曾岬小・中学校（509人）の授業が、小中学生共に1学年1学級で、当分は午前中だけ授業。	
20日	【長島中学全員集合】 ○電通学園と高田本山に避難していた長島中（128人）が伊勢市の神都道場に到着し、先に四日市から自衛艦4隻で伊勢市に着いていた300人（五鈴館に男子145人、奥野家に女子155人）と再会し、長島中学校が23日目に全員集合した。 ○現在3つの避難所（修練道場、五鈴館、奥野家）と近くの進修小学校を借りて授業。	

記事に基づき、両町村に共通する内容と各町村毎の内容とに区分して、経過時間で箇条書きに羅列したものです。

ところで、未曾有の大災害の渦中で奮闘した新聞記者は、「災害の現状を正確に詳しく伝える」ことを旨としていましたが、当時は現代のような高度の通信機器は完備しておらず、「伝書鳩」が活躍していた時代であることから、各

紙毎に被災者の移動人数等が異なるのはやむを得ない事と考えられます。したがって、本章が記している移動人数等は概ねの数「概数」と認識して下さい。

六二 避難の概況

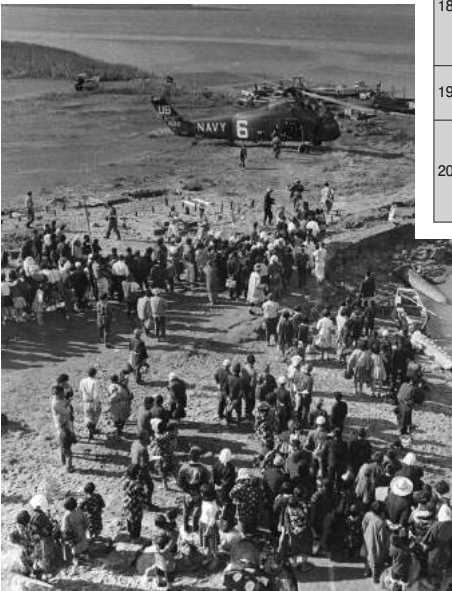
一日から集団避難を開始しましたが、泥海に孤立した家屋に残る被災者を小舟で、あるいは泥海の水かさが増す満潮時を狙って、揚陸艇等で救出し、集団避難集合場所に移動させています。

ところで前述したように、各集落の被災状況は海岸からの距離によって大きく異なっており、南北に細長い長島町を北部・中部・南部の三地区に分けると、概ね近鉄名

古屋線より北の「北部地区」が最も被害が少なく、概ね国道二三号線（名四国道）より南の「南部地区」（伊曾島地区）での死者は全体の七割以上を占めています。また、木曾川と鍋田川に囲まれ、長島町の「中部地区」よりも南に位置する木曾岬村は惨憺たる被害状況でした。

このように地区によって大きく被害状況が異なっていましたので、集団避難への取り組みも地区ごとに異なっています。

長島町伊曾島地区などの被害の甚大な地区は集団避難に積極的であり、早くも二日には、三日の集団避難予定日を繰り上げて、老幼婦女子や学童計九六人が鈴鹿市の電通学園に米軍のヘリコプターやバスを乗り継



■ 桑名郡長島町都羅新田（揖斐川左岸側）に着陸した米軍ヘリに集まる被災者（提供 朝日新聞社）

■ 県営避難所での避難者の移動状況

避難所	避難者	10月2日	3日	4日	5日	6日	8日	9日 の 学校再編計画	12日	14日	17日	18日	20日	開設から15日 までの日平均 『三重県の災害誌』より	16日～31日 までの日平均
鈴鹿避難所 (電通学園) 10月2日開設 定員1308人	長島町	— (96人)	— (560人)	電通学園の収容 定員は1308人 (中目新聞)	— (746人)	128人(長島中) が電通と 高田へ 注)参照	— (735人) (7班～12班) (中目新聞が氏 名明記)	○219人(伊曾島小)が 14日に移動⇒(A) ○約100人(長島南小) が18日に移動⇒(B) ○長島中(C1)は 20日に移動⇒(C)	高田本山から 8日に移動した c1とc2の 合計が128人	413人 (校名不明)				353人 (657人) 避難者総数 (657+563) =1220人	29人 (302人)
	木曾岬村		99人(木曾岬小) (215人)		— (591人)	— (527人) (1班～6班) (中目新聞が氏 名明記)	○487人(木曾岬小) 345人+中142人が 移動⇒(D)	高田から8日に 移動した298人 が487人と記載	376人 (校名不明)					351人 (563人)	25人 (193人)
高田本山 10月3日開設 定員500人	長島町	全避難民643人内、 215人は電通学園へ 428人は高田本山へ 分散避難		— (約50人)	高田本山の収 容定員 500人 (中目新聞)	128人(長島中) が電通と 高田へ 注)参照	219人 (伊曾島小) 電通へ移動	○約100人(長島南 小)が18日に 移動⇒(B) ○長島中(C2)は20 日に移動⇒(C)	電通のc1+高田 のc2=128人					48人 (79人)	8人 (32人)
	木曾岬村		— (428人)	— (約150人)		7割が児童数 (239人)	避難者数 約330人との 記載有り	298人 (木曾岬小中) 電通へ移動						123人 (255人)	13人 (160人)
【避難者数について】 本表は、中目・毎日・朝日の新聞記事から纏めているが、同一新聞でも人数等について異なる場合が多々あった。 しかし、本章ではこれら異なる人数を統一することはせずに、そのまま記載している。このため人数は「概数」である。 また、本表中の避難者数は、分母の()内に総避難者数を、分子に避難者児童数と()内に所属学校名を記載した。 なお、児童数が不明の場合は児童数を横棒で示し、総避難者数が不明の場合は、児童数(所属学校名)だけを記している。 ○表記の例 児童数(所属学校名)/総避難者数 又は —/総避難者数 注)「県営避難所」避難者調べの累積避難者数を日平均に直した。 『日本自然災害資料集 第四巻伊勢湾台風災害誌』三重県 昭和36年						如雲園 10月5日開設	○500人(長島南小) ○270人(長島北小)	268人(長島北小) は18日に楠小へ 移動⇒(E)	○269人(長島南小)と職員14人 ○268人(長島北小)と職員10人	6日記載の長島南小の 500人が269人と記載	⇒(B) 478人(長島南小)の全児童が 集合		582人 (599人)	504人 (518人)	
						五鈴館 10月5日開設	135人(男子)	注) 長島中の避難生徒405人内、 128人(=405-[五鈴館と奥野家の 計277人])は電通学園と 高田本山へ分散避難	135人(男子・長島中)と校長・職員7人	9日記載の電通学園の約100人と 高田本山の約100人の合計が209人。 如雲園の289人を加えて、209+169=478人			126人 (133人)	140人 (147人)	
						奥野家 10月5日開設	277人(長島中)	142人(女子)	142人(女子・長島中)と職員7人				128人 (139人)	143人 (149人)	
						三重県立大学 10月3日開設 定員300人	⇒(A) 253人(伊曾島小)と教師12人 が移動	電通学園から移動		38人 (39人)	253人(伊曾島小)と教師12人 が移動				
鈴森荘 10月4日開設	⇒(D) 487人(木曾岬小中)が移動	木曾岬小中(小345人+中142人=487人)が 電通学園から移動 (23日の毎日新聞は 509人と記載)			487人 (507人)										
楠小学校 15日開設	⇒(E) 268人(長島北小)が如雲園 から移動				233人 (242人)										
神郡道場 長島町 18日開設	長島中学生(電通学園のc1と 高田本山のc2)の合計 (c1+c2)=128人	⇒(C) 128人(長島中) が移動			68人 (123人)										

いで避難していま
す。一方、比較的軽
微な被害の被災者は
防災上の理由で避難
を渋ったためか、関
係者は避難するよう
に説得しています。
三日に長島町と木
曾岬村からの集団
避難が本格化し、両
町から二二〇三人
(一三七七人との記
事も有り)が電通学
園と高田本山へ船や
ヘリコプター、バス
で避難しています。
一方、被災者の避

と中学校の
ために学校に
足を臨時教
ます。

い避難していま
す。一方、比較的軽
微な被害の被災者は
防災上の理由で避難
を渋ったためか、関
係者は避難するよう
に説得しています。



■ 桑名の住吉船着場から上陸用舟艇に乗り、損斐川河口で自衛艦に乗り換えて伊勢市に向かう避難学童

と中学校の教師が五人ずつ管理のた
めに学校に残り、避難先での教師不
足を臨時教員で補うことになってい
ます。

難所収容が進むにつ
れて、集団避難した
児童生徒の教育環境
の整備も緊急課題と
なりました。

六日には、臨時避難校の開設計画
が公表され、授業再開のため、避難
先での学校別の再編が九日から行わ
れることとなりました。そして、電通
学園に避難した長島南小・伊曾島
小・長島中と木曾岬小・中学生の授
業再開が二日に予定されました。

しかし、二日からの電通学園での
授業再開予定が対策本部と県教育委
員会の意見の相違等で延期となった
ことを報道で知り、長島町と木曾岬
村の父兄が、二日に抗議に押し寄せ
ています。



■ 鳥羽港に入港した被災者(『伊勢湾台風30周年記念』より)

同表より、避難に関する新聞報道は、避難当初は①住民と児童・生徒を含んだ総避難民の移動（黄色）を取り上げ、児童・生徒の集団避難開始以降は②児童・生徒の避難移動（水色）に重点が置かれていました。なお、右隅の二列（桃色）は、三重県の災害誌に掲載されている「滞在日数期間での延べ滞在者数」を滞在日数で除して日平均に換算したものです。

ところで、同表中の避難者数の表記に関しては、分母の（ ）内に総避難者数を、分子に避難児童数を書いていきます。なお、総避難者数だけが判明している場合は分子の避難児童数を横棒にし、避難児童数だけが判明している場合は、児童数の後の（ ）内に学校名を記しています。

①二日～五日（黄色）は、主に県営避難所への避難者総数であり、電通学園では早くも五日の時点で収容定員（一三〇八人）以上の一、三三七人となっています。

②六日～二〇日（水色）は、避難者総数が不明で避難児童数とその学校名だけが分かっている場合は、児童数の後に（ ）書きで学校名を記しています。

この期間、電通学園と高田本山では入所してきた避難児童が学校別に各授業再開用避難所に分散していく過程が分かります。なお、長島中学の避難生徒四〇五人の内二七七人は、六日の避難当初から男子と女子に分かれて五鈴館と奥野屋に避難

し、残りの一二八人は電通学園と高田本山に分散避難した後、二〇日に再び伊勢市の五鈴館と奥野屋に隣接している神都道場に集合しています。

九日の「避難所での学校別再編」が発表され、如雪園にいた長島北小（二六八人）が楠小へ移動したのに伴い、電通学園と高田本山に分散していた長島南小（計二〇九人）が如雪園に移動し、すでに避難していた二六九人と合同して長島南小の全生徒が集まっています。また上述したように、高田本山に避難していた木曾岬村の小・中学生が電通学園を経て鈴峯荘に集合しています。

また、右隅二列の日平均滞在者数の表より、電通学園避難所の開設二日から一五日までの日平均滞在者数は一二二〇人（小・中学生は計七〇四人）で、収容定員（一三〇八人）より若干少ない程度の人数となっています。しかし、同表の五日での避難者数は両町村で計一三三七人で定員をオーバーしています。また、「九日の学校再編計画」実施に伴って、電通学園に避難していた小学校三校と中学校二校が九日以降に他の避難所へ移動しており、九日以降の避難者数は減少しているはずですが、つまり、二日～九日までの間は、「スシ詰め」状態を指す人数であったと考えられます。

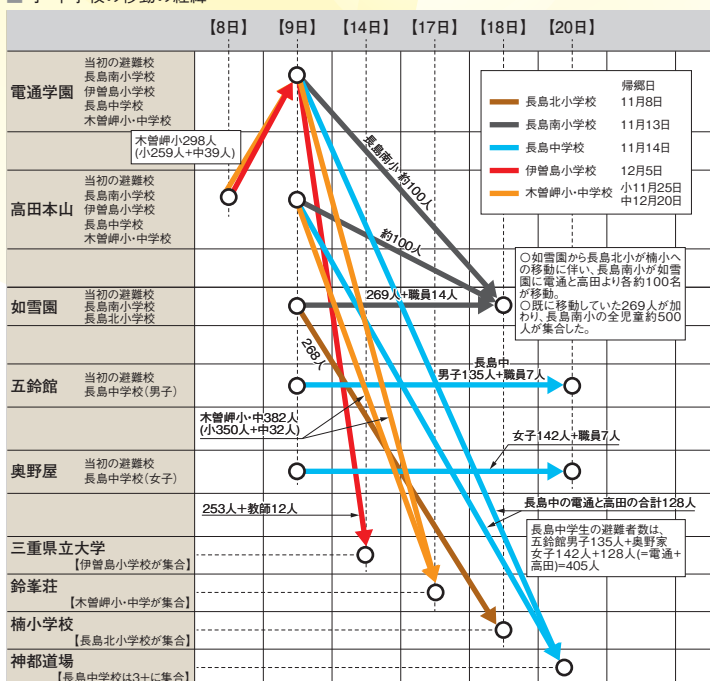
一方、三日に開設した定員五〇〇人の高田本山では、八日に定員を上回る両町村の小・中学生五一七人が

電通学園に移動していますが、九日以降にも小学校と中学校の各二校が他の避難所に移動していることを勘案すると、三日～一五日までの日平均滞在者数三三四人（小・中学生は計一七一一人）は、「電通学園より少しは余裕があった」と推測される人数であったと思われます。

同表中の数字は前述したように報道記事をもとにした概数であり、「前から居た人数」が加算された可能性もあります。例えば、八日に高田本山に避難していた木曾岬小・中学生（二九八人）が九日の電波学園へ四八七人（小三四五人・中一二二人）移動したとなっており、この増加した「一八九人」が報道による「バラツキ」

か、九日以前からの滞在者数は不明です。同表中で、人数等の記載の違いや分散避難の状況などは「吹き出し」で表記しています。

■ 小・中学校の移動の経緯



七. 小・中学校の移動

図は、長島町と木曾岬村の小・中学校の移動の状況です。

電通学園避難所は最も早く二日に開設され、収容定員も一三〇八人と最大で、長島南小・伊曽島小・長島中学校と木曾岬小・中学校の計五校が避難していました。

また、三日に開設された高田本山避難所の収容定員は電通学園に次ぐ五〇〇人で、長島南小・伊曽島小・長島中学校と木曾岬小・中学校が混在していました。

その後、一四日～二〇日までに学校別に再編され、前述したように、長島中学校は二〇日に避難当初から

の五鈴館（男子一三五人）と奥野家（女子一四二人）に、また電通学園と高田本山から神都道場（一二八人）への移動し、計三ヶ所に集合しています。

この他、伊曾島小学校は三重県大に、木曾岬小中学校は鈴峯荘に、長島南小学校は如雪園に、長島北小学校は楠小学校に集合しています。

各学校の帰郷は、長島町では地域的に被害が一番軽かった長島北部地域の長島北小学校が一月八日と一番早く、被害が甚大だった長島南部の伊曾島地区の伊曾島小学校が二月五日と遅くなっており、帰郷の遅速は地域の復旧と連動していると推測されます。

八：集団避難した人々の想いで

平成三〇（二〇一八）年八月、当時長島町の小学生であった男女八名（現北部小学校二名、伊曾島小学校四名、現中部小学校二名）の方々に、避難時の記憶をたどって頂きました。

被災時から六〇年近くになろうとしている現在、当時の辛くて悲しい体験も徐々に癒され、「懐かしい想いで」に替わってしまった側面も感じられました。親元を離れての心細かった避難経路については、多くの人々が詳しく覚えていました。例えば、伊曾島小学校の人は避難経路について、①伊曾島小学校横の砂浜（長島町都羅新田の揖斐川左岸）に

集合して、②ヘリコプターで精義小学校（桑名市寿町。この学校名は新聞記事に無）からバスで電通学園に避難し、③二週間ほど滞在して、三重県立大学へ移動したとのことでした。

また、長島南小学校（現中部小学校）の人は、①被災から一週間後の月曜日（一〇月五日）に様々な手段（軽トラックや舟）で対岸の住吉舟着場に集合し、②自衛隊の小型の舟（上陸用舟艇）で沖に出て、③段差の大きい梯子を怖がりつつ自衛艦に乗り、④艦内で「乾パン」を貰って鳥羽港に向かい、⑤バスで如雪園に行き、⑦団体・地区・学年別に部屋割りされた、と実に詳しく記憶をされています。

また、参加して頂いた男性陣は、「疎開から一週間目頃に近鉄が開通



■ お話を聞かせて頂いた人々（敬称略）。
後列左から高木安郎、杉浦文江、服部たみ子、濱田わか
前列左から日沖茂行、金森泰久、服部義和、早川春美

したので、一、二年の低学年の母親が面会に来たが、親が帰った後に恋しがったので、その後、面会が禁止になった」と明るく語っておられました。しかし、彼らは当時三、四年生であり、彼ら自身が感じた寂しい思いを下級生の話として語ってくれた、と強く感じました。

九：終わりに

本章では長島町と木曾岬村からの集団避難状況を新聞記事を中心に取りまとめました。

被災地での不衛生ゆえの伝説病の蔓延、集団避難時の混乱、避難先での学童・生徒達の教育等、非日常の出来事が次々と被災者全員に襲いかかりました。しかし、伊勢湾台風から早や六〇年を経て、当時の児童生徒もシルバーエイジとなり、伊勢湾台風による激甚な被災経験も徐々に薄れ始めているようです。

今回取り上げた被災時の集団避難状況等の記録は、本来であれば、被災当時にまとめられていてもおかしくない内容ですが、そのような資料は見つかりませんでした。そこで本章では当時の新聞記事を中心に、これまで記録として整理されていなかった集団避難の内、児童・生徒の避難移動を中心にまとめました。

先日、常に快活な友人に伊勢湾台風六〇周年記念の話をしたら、「今まで言わなかったが、高校生の妹を伊勢湾台風で亡くした。話そうと思ったが、涙が出るのでやはり話すのを止める」と、話されました。年月の経過と共に悲しみが和らいで来ているとは言え、肉親を亡くした多くの人の心の奥に、まだ癒しがたい多くの想いが残っていることを痛切に感じています。

＊参考文献＊

- 輪中と高潮伊勢湾台風風の記録
伊藤重信編著 三重県郷土資料刊行会 昭和五十七年
- 木曾岬村史
木曾岬村役場 昭和四十四年
- 日本自然災害資料集
第四巻伊勢湾台風災害誌 三重県 昭和三十六年
- 写真集伊勢
国書刊行会 昭和六十一年
- 忘れない伊勢湾台風50年
中日新聞出版部、二〇〇九年